

3 土 器

調査地全域から、弥生時代から室町時代に至る各時代の土器類が多量に出土した。これらの土器類は、遺構との関連によって、宮造営以前のもの、平城宮時代のもの、宮廃絶後のものに大きく3分することができる。土器の種類・構成・器種は、当然のことながら時期によって相

* 互に異なり、また使用場所である遺構と深く関連し、遺構の性格を反映していると思われる。したがって記述にあたっては、前述の3段階に分け、まず各段階毎に出土状況を概括し、次に各段階を特徴づける土器類、主として遺構に伴って出土したものを中心に観察結果を報告してゆくことにしたい。なお、宮廃絶後の土器類の検討に資するため、第15次調査で検出し、遺構についてはすでに報告済みである土壙 SK1623出土の一括資料を併せ収録することにした¹⁾。

記述の順序

* 土器の説明に先立ち、特に奈良時代の土器類についての記述の煩雑さを避けるため、あらかじめ若干のとりきめをしておく。基本的に土器の成形・調整手法・器種名・時期区分については『平城宮報告Ⅶ』および『平城宮報告Ⅺ』に従うものである。

用語に関するとりきめ

1. 平城宮跡から出土する供膳形態土師器の成形法には次の3種がある。一つは大形の木の葉の葉脈のある面(裏面)の上で粘土紐を巻き上げる方法(木の葉成形手法)であり、底部が広い

供膳形態土師器の成形手法

* 杯・皿類の製作に採用される。第二は同じく粘土紐巻き上げ成形であるが、木の葉を使わない方法で、椀や小型壺(壺B)の製作に採用される(左手手法²⁾)。他のもう一つは須恵器の製作技法と共通するもので、回転台(ロクロ)の上で粘土紐を巻き上げて大方の形を作った後、細部の引き出しや調整をロクロ回転を利用して行なう方法(粘土紐巻き上げロクロ成形法)である。平城宮跡出土の供膳形態土師器の多くは木の葉手法・左手手法で成形されたものであり、ロクロを使った例は極めて少ない。今回報告する地域からは、平安時代のものがわずかに1点出土したに過ぎない。

木の葉成形手法後に行なわれる第1段階の調整法には3種あり、a・b・c手法と呼んでいる。a手法は1方の掌にのせ、他方の手を使って口縁部内外面を横方向になでる(ヨコナデ法)。b手法はヨコナデ調整した後、さらに底部外面をヘラケズリする。c手法は外面を全体にわた

* ってヘラケズリする。左手手法に伴う調整法には、片方の掌にのせもう一方の手で口縁部上端を強くなでるだけのe手法がある。e手法で調整後、さらにヘラケズリを加えるものもあるが、b手法に対応する例はなく、ヘラケズリを施すばあいは全面を削る。

第1段階調整法

調整の第2段階として、器面を整えるためヘラミガキを施すが、その及ぶ範囲・部位によって、0手法：ミガキなし、1手法：口縁部外面のみをミガクもの、2手法：底部外面のみをミガクもの、3手法：外面全面をミガクものに分け、第1次段階のa・b・c3手法と組み合わせ

* てa₀, a₁, a₃, b₁, b₂等のように表現する。

第2段階調整法

成形・調整手法は時代とともに変遷する。9世紀初頭を境に、それまで優勢だった木の葉手

1) 『平城宮報告Ⅸ』p. 22。

2) 「左手手法」は左手の上で粘土紐を巻きあげること想定して命名された(田中琢「古代中世における手工業の発達 窯業一畿内」『日本

の考古学Ⅵ』p. 191)。ここではその手法の存否は問わず、木の葉手法でない粘土紐巻き上げ手法の総称として用いている。

法は姿を消し、左手手法が盛行する。調整手法も次第に手順の省略化が進行し、調整の第2段階（ミガキ）を省く傾向を示す。また奈良時代後半を境に、それまで盛行したc手法はe手法に取ってかわられ、10世紀後半には完全に姿を消す。

胎土等による群別

2. 平城宮跡から出土する奈良時代の土器の大半は、胎土組成・発色・製作技法の上から、次に述べる2つのグループのいずれかに属す。I群の土師器の表面の色調は、白色を帯びた灰色味の強い灰褐色を呈す。断面の色調は橙褐色で、ほとんど砂粒をまじえない胎土組成を示し、均質に焼きしまっている。一方、II群の土師器の表面は灰褐色ないし暗褐色を呈す。断面は暗茶褐色系の色合いで、白色粒子・くされ礫・チャート礫等を多量に含み、I群に比べ多孔質に焼き上がっている。I群土師器は9世紀頭以降みられない。II群土師器にあっては8世紀後半以降次第に砂の含有量が多くなる傾向を示す。また、9世紀以降10世紀前半頃までの土師器もII群系統に属するという分析結果を得ている。¹⁾

群別に応じた製作技法の差

群の違いに応じて製作技法にも差が認められる。高杯を例にとりて述べよう。杯部と脚部の接合法は、I群では杯部底中央に粘土紐もしくは粘土の輪を積み上げる方法をとるのに対し、II群では杯部中央に粘土を補填し、そこに棒を差し込み、棒に粘土を巻きつける方法をとっている。接合後に行なわれるヘラによる脚柱部の面取り方法も異なる。I群では杯部と脚部の付け根から裾部に向って削りおろすのに対し、II群では裾部から一気に、時には杯部と脚部の付け根でいったん止めるばあいもあるが、棒を固定した補填粘土の及ぶ範囲まで削りあげる方法をとる。また、I群の高杯の脚部内面は裾部をヨコナデ、脚柱部をナデで調整するが、II群のばあいには裾部内外面と脚柱部の外面をヘラケズリで調整している。なお、杯・皿等に関しては、8世紀後半以降になると、I群でヘラケズリする例は少ないのに対しII群ではほとんどすべてヘラケズリ調整するという相違点も指摘できる。

須恵器の成形手法

3. 須恵器の供膳形態（杯・皿・碗）の成形手法は、前に触れたように粘土紐巻き上げロクロ成形であり、粘土塊から直接製品を引き出す水挽きによる例はない。ただし、奈良時代後半には、一部の器種（壺G・壺L・壺M）の製作にこの方法が採用されている。

粘土紐巻き上げロクロ成形法において、ロクロから製品を切り離す際には、ヘラを押し込んで切り離す例（ヘラ切り）が大半を占め、切り離しに糸を使用する例は極めて少ない。成形後に行なわれるロクロ回転を利用したケズリ・ナデをそれぞれロクロケズリ・ロクロナデと呼称する。

須恵器の群別

4. 須恵器についても、胎土組成・調整手法の違いによって、I～IVの4群に区分できる。I群は暗青灰色を呈する硬質のもので、胎土中に白色粒子・黒色粒子を若干含む。杯・皿類に関しては、わらを器間に挟んで重ねて焼成するため、火禱を持つ例が多い。平城宮跡から出土する須恵器の大半はこの類で、器種も豊富である。II群は灰色味の強い灰青色を呈し、砂粒は少ないが黒色の粒子を多量に含む。この黒色粒子はもろく、ロクロナデ・ロクロケズリによって墨をばかしたような観を呈す。8世紀前半に顕著に見られる傾向であるが、非常に丁寧なヘラケズリを行なっており、土師器の手法に特有なヘラミガキを施す例も多い。I群と同様火禱を持つものが多く、ほとんどひずみなく焼きあがっている。平城宮跡では量的にI群に次いで多くを占め、器種は供膳形態のものが主体をなす。III群は粗砂粒をかなり含むが、硬質に焼き締

1) 『平城宮報告XI』p. 257。

っている。器種は少なく、杯B・同蓋・皿B等に限られるようだ。これらの器種の製作にあたっては、同心円状の刻みを持つて板を使って粘土塊を平坦にのばして底部を作った上で口縁部・緑部を作る点で他の群と異なる。また、形態的にも他群と異なり、全体に分厚く量感があり、杯B・皿Bでは高台部外側面が内傾し、杯B蓋は扁平でつまみが逆台形である等、一見して他と区別がつく。IV群は灰白色を呈し、胎土は極めて細かいが焼きが甘く、粉をふいたような焼き上りのものである。8世紀初頭の杯等に若干認められる程度で例外的な存在である。

以上の他、平城宮内では量的に少ないが、I～IV群のいずれにも属さない須恵器が存在する。京内ではこのI～IV群以外の須恵器がかなりの量知られており、今少し資料の増加を待てばさらに群別が可能な状況である。これらのうち産地が同定できるものとしては、美濃産・猿投産・三重県産・兵庫県産等がある。

平安時代に入ると全体的に須恵器の供膳形態は減少の一途をたどる。9世紀初頭頃までは、I群須恵器がまだ若干見られるが、同後半になるとI群に替って黒灰色～暗灰色を呈する別の一群が出現する。この一群は、胎土・技法・器形の上から、京都府亀岡市に所在する篠古窯址群の産と考えられる。

* 5. 黒色土器には内面のみを黒色処理するものと、内外両面を黒色処理するものと2種があり、前者をA類、後者をB類とする。

6. 平城宮・京から出土する土器の編年については、技法面の観察・器種構成の上でI～VIIの7グループに大別している (Tab.5)。年紀のある木簡等の伴出によってこれらの実年代の一端が知られており、記述にあたっては「平城宮土器I」というような表現で型式と年代観を示す。I～Vが平城宮時代に属し、VIは長岡京の時期であるが、基準資料となるような土器を検出していない。VIIは平城上皇還都の時期にあたる。VII以降については、まだ詳細な型式変遷の構図を完成していないが、平城京左京一条三坊における東三坊大路東側溝の下層 (SD650A)、同上層 (SD650B)、薬師寺西僧房床面出土一括土器という順で、大きな区別を設定しており、SD650Aが9世紀中頃～後半、SD650Bが9世紀後半～10世紀前半、薬師寺西僧房は10世紀後半代と考えられる (第V章3参照)。

* 7. 実測図は原則として1/4に縮尺するが、大型品や細部を表現する必要があるばあいは、適宜、より大きな縮尺を採用する。実測図に入れる線は、主として稜と凹部および調整の変換線

大別名称	略年代
平城宮土器I	710A. D.
平城宮土器II	725
平城宮土器III	750
平城宮土器IV	765
平城宮土器V	780
平城宮土器VI	800
平城宮土器VII	825

Tab. 5 平城宮土器の大別

* 7. 実測図は原則として1/4に縮尺するが、大型品や細部を表現する必要があるばあいは、適宜、より大きな縮尺を採用する。実測図に入れる線は、主として稜と凹部および調整の変換線に限定する。また、土師器における手持ちヘラケズリ、須恵器のロクロ目は表現しない。黒色土器で口縁部内面に草花紋の暗紋を持つばあいは、内面ヘラミガキは表現しない。実測図に付した土器番号はPL・Figに共通した通し番号で、土器の種類毎に以下のように分けて表示するようにしている。1～199が土師器 (弥生土器)、200番代が須恵器、300番代が黒色土器、400番代が瓦器、500番代が灰釉陶器・白瓷系陶器、600番代が緑釉・三彩陶器、700番代が輸入陶磁器、800番代が特殊土製品 (硯・土錘・土馬) である。

A 平城宮造営以前の土器 (Fig. 47)

宮造営以前の土器には弥生土器および古墳時代の土師器・須恵器がある。これらは馬寮地域内を西北から東南に向って流れる旧水路 S D6060の埋土およびその両岸にある小土壙や溝などから出土した。

i 弥生土器

弥生土器は主として SD6060の両岸にあるいくつかの小土壙から完形に近い形で出土した。SD 6060の埋土からも発見されているが、これらは小片である。弥生土器はいずれも遺存状態が極めて悪く、器面が剥落し、調整・施紋等を観察できるものは少ない。器種には壺と甕があり、すべて畿内第 I 様式に属す。8は土壙 SK6122から出土したもので、胴部最大径16.2cmを測る小型壺である。頸部に2条の沈線がめぐる。

ii 土師器

土師器は S D6060から大量に出土したが、完形に近いものは少なく、遺存状態が悪いため調整手法を観察できるものは少ない。完形に近いもののみを図示し、他の破片については器形の紹介にとどめたい。

SD6060から出土した土師器には、布留式の範囲に入るもの(4世紀末~5世紀前半)と須恵器の生産が始まって後のもの(5世紀後半代)とがある。両者は共に SD6060の同一層位(上層の荒砂)から出土している。布留式の系統に属するものには椀A(1)、高杯A(5・7)、高杯X(6)、小型丸底壺A(2・3)、器台A、器台B(4)、壺A、壺D(15)、壺E(16)、壺F(13)、甕A、甕I、甕X(9)等がある。須恵器を伴う時期の土師器の器種には高杯B、高杯C、小型丸底壺C(10~12)、壺B(14)、甕、甕等がある。

iii 須恵器

須恵器は SD6060から総数10片、3個体分の破片が出土したのみである。器種には高杯、長頸壺、甕がある。高杯(200)は短脚三方透有蓋高杯で、脚部と杯部外面にカキメを施す。長頸壺(201)は頸部から上位を欠失するが、胴部に二条の沈線によって区画を作り、その中に櫛歯波状紋を施す。底部はナデで調整するが、手持ちヘラケズリの痕跡をとどめる。

B 奈良時代の土器 (PL. 60~62, Fig. 48)

発掘面積が広い割には奈良時代の土器の出土量は少なく、全般的に散在的な出土状況を示すが、調査地域東北部の馬寮東官衙域周辺の溝や包含層からは比較的集中して出土している。馬寮域内では、井戸や西辺にある長方形土壙 SK6350、あるいは建物周辺の包含層から少量出土

1) 器種名は『平城宮報告X』にしたがって記述する。

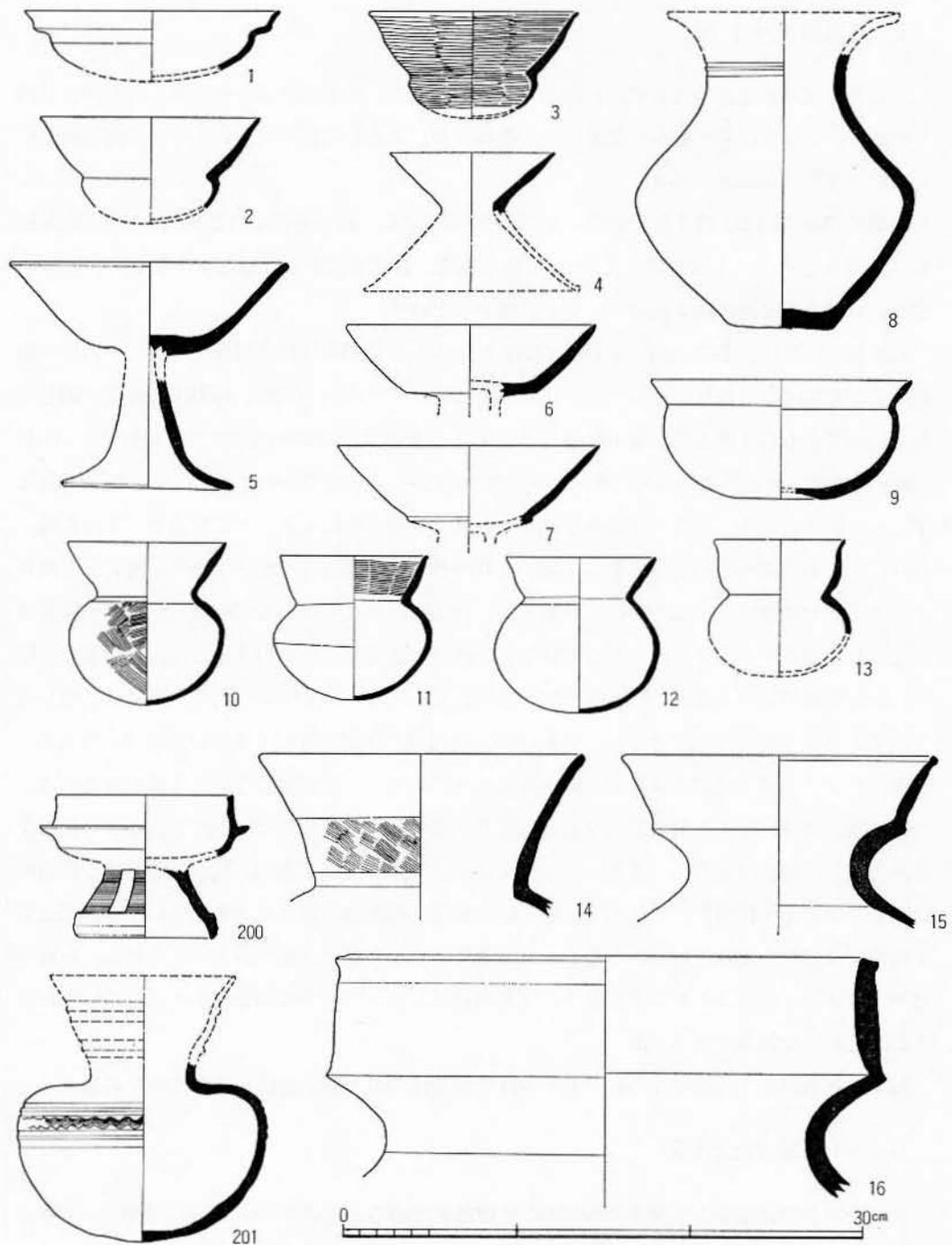


Fig. 47 宮造營以前の土器類実測図

しているに過ぎず、塵芥処理用の土壌がほとんど無いのが馬寮地域の一つの特色となっている。

- * 出土土器の内容からも馬寮域の特色を知ることができる。まず施釉陶器は1点（三彩）、陶硯は2片と非常に少なく、一方漆容器の出土量がかなり多い点の一つの特色である。つぎに須恵器と土師器の比率をみると、7:3の割で須恵器が多く、しかも須恵器の大半は壺・甕であり、杯・皿等の供膳形態は少ない。杯B・杯B蓋等では、硯として利用した例が多いのも一つの特徴として扱えられよう。なお、土器類の年代については、8世紀前半代のものは土壌SK6350、溝SD5950・6151・6152出土品以外は認められず、大半は後半代に属す。

i 包含層出土土器

土器類の大多数は遺物包含層から出土したものであり、総じて遺構から出土したものより残りが良い。ここでは包含層から出土した土器のうち、主として完形に近いものと形態の珍しいものを取りあげることにする。

土師器 土師器の皿AI (33) はI群土器で、 a_0 手法で調整する。底部外面には指頭痕および粘土紐*の痕跡をとどめる。土師器碗A (32) はII群土器で、底部外面から口縁部下半部をヘラケズリする。口縁部上半部には2段のヨコナデ痕跡をとどめる。

須恵器 須恵器の杯BにはBIII (231) とBIV (230) とがある。杯BIIIは底部周縁よりかなり内側に断面梯形状を呈する短低な高台がつく。底部外面はロクロケズリで調整、杯BIVは底部不調整である。両者ともにI群土器。杯BIV蓋 (229) もI群土器で、頂部外面はナデで調整する。壺E* (232) は底部外面と体部外面をロクロケズリで調整する。底部外面のケズリは中心部まで及ばず、ヘラ切り痕をとどめる。体部外面はヘラケズリの後さらにロクロナデを施す。I群土器。壺Gには、器高22cmを超える大型品 (238) と19cm程度の小型品 (237) とがある。両者ともにロクロケズリを施さず、底部外面には糸切り痕、体部にはロクロ目をとどめる。ロクロ水挽き法によるが一気に引き上げられたものではなく、体部と頸部を別々に引き出し接合したもの。壺* M (235) は徳利形の小型壺。粘土塊から一気に引き上げられたもので、頸部内面にはしぼり目を残す。ロクロケズリは施さない。壺L (234) は横長の体部と外反する短い口縁部からなる。体部はロクロケズリで調整するが、底部外面はヘラ切りのまま調整しない。I群土器である。壺H (236) は側面形逆台形状を呈する体部に大きく外傾する頸部がついた広口壺で、口縁部上位が外反し、端部は上方につまみ上げられている。底部外面は不調整。灰白色を呈する軟質の* 焼き上りで、I~IV群のいずれにも属さない。壺蓋 (233) は口径よりやや小さい径の平底と若干内彎気味に立ち上る口縁部からなる。双耳瓶等の頸部の低い壺類の蓋と考えられる。口縁部はロクロケズリの後ロクロナデを施す。底部外面はロクロケズリで調整。I~IV群のいずれにも属さない。東海産であろうか。

以上の包含層出土土器のうち、壺E・Lは平城宮土器II~III、他は平城宮土器Vに属す。

ii SD 6499 出土土器

馬寮東官衙の北限をなす築地 SA6510の北雨落溝である東西溝 SD6499から、量的には多くはないが、奈良時代末の土器類や土馬が出土した。

土師器 土師器の器種には杯C・碗A・壺B等がある。杯C (18) はII群土器で、 b_0 手法で調整する。碗Aの法量はほぼ均一だが、 c_0 手法によるもの (21・22) と c_3 手法によるもの (19・20) があ*る。どちらもII群土器である。壺B (23) は、一般に墨で人面を描きまじないに使用する甕と共通した特色をもつ。口径が胴径を上回る広口甕の形態をなし、体部中程よりやや上位の相対する位置に小さな粘土塊を貼り付けている。口縁部はヨコナデするが、体部はハケメなどの調整を施さず、粘土紐巻き上げ痕跡を残す。火を受けた痕跡はない。

須恵器 須恵器の器種にはI群土器の杯BIVと壺蓋がある。杯BIV (216) は底部ヘラ切りのまま不調*整である。壺蓋 (213) は宝珠形のつまみを持つ広くて平坦な頂部とやや外方に開く短い縁部か

らなり、頂部外面をロクロケズリで調整する。

iii SD 6477 出土土器

馬寮城の北を限る築地 SA6475の北雨落溝 SD6477から少量ながら土師器・須恵器が出土した。小片が多く、器形・法量を識別できる個体は図示したものにとどまる。すべて平城宮土器

* Vに属す。

土師器の器種には杯 AI と壺 B がある。杯 AI (17) は I 群土器で、 b_0 手法で調整する。壺 B (24・25) は墨描人面土器の甕と共通した形態で、口縁部をヨコナデするが、体部外面は不調整で粘土紐巻き上げ痕跡をとどめる。SD6499から出土した壺 B (23) に比べ、体部上位が丸味を帯び、底部近くが屈曲する。

* 須恵器には杯 BIV 蓋・壺・甕片がある。杯 BIV 蓋 (215) は扁平で平坦な頂部と外反する縁部からなる。頂部外面はロクロケズリで調整。つまみ頂部に「井」の字の墨書を持つ。

iv SD 5960 出土土器

馬寮東官衙南半部の西限をなす南北溝 SD5960から奈良時代初頭(平城宮土器 I・II)の土器が少量出土した。SD5960は総長 160m を発掘したが、土器は散在的な出土状況を示し、全体

* で整理用木箱 1 杯にも満たない。

土師器の器種には杯 A・皿 A・高杯等があるが、いずれも小片で遺存状態も悪く観察に耐えない。

須恵器には杯 A・杯 B・杯 B 蓋・皿 B・碗 A・壺蓋・甕等の器種がある。杯 A II₂ (202) は口径の大ききの割に器高の低い杯で、底部外面をナデで調整するが、ヘラ切り痕跡が明瞭に残る。I 群土器である。杯 A にはこの他に I~IV 群のいずれにも属さない杯 A III が 1 点ある。杯 B I (205) は底部の器壁がきわめて厚く、口縁部は内彎気味に立ち上る。III 群土器に近い胎土組成を示す。杯 B II (206~208) には 3 種ある。206 は内彎する口縁部で、高台端面が外傾する。底部外面をロクロケズリで調整する。I~IV 群のいずれにも属さない。207 も口縁部が内彎するが端部近くで外反する。底部外面をロクロ回転を利用しないヘラケズリで調整する。208 は外反する口縁部で、底部外面周縁よりやや内側に低短な高台を付ける。底部は高台部より突出する。杯 B III (209) は口縁部が直線的に外方に開き、底部外面周縁近くに外方に踏んばる低短な高台を付す。底部外面は不調整。I 群土器である。底部外面を硯に転用。杯 B II 蓋は (204) I 群土器で、平坦な頂部と内彎する縁部からなる。頂部外面はナデで調整する。内面を硯に転用している。杯 B III 蓋 (204) は I 群土器で、傘形の頂部とわずかに屈曲する縁部からなる。頂部外面をロクロケズリで調整する。碗 A (212) は器高に比して口径が小さく、口縁部の外傾度も小さい杯 A 形態で、底部外面をロクロケズリする。II 群土器。壺蓋には、口径 9.5cm、器高 3.3cm の小型品 (211) と、口径 13.6cm、器高 2.6cm 程度の中型品 (210) とがある。前者は平坦な頂部に比較的大きい宝珠形のつまみを持ち、口縁部は外反する。後者は扁平なつまみで、壺にかぶせて焼成するため口縁端を小さくつまみ上げている。両者とも I 群土器。

1) 従来「墨書人面土器」と呼んでいたが、文字ではないので「書」を「描」に変更した。

v SD6160 出土土器

第IV期の馬寮東限を画す築地 SA5950Bの東雨落溝 SD6160から少量の土器と祭祀用の小型カマド形土製品が出土した。土器類は平城宮土器Vに属し、須恵器が多く土師器は少ない。

土師器 土師器には杯B・皿A・椀A・高杯・盤・甕等の器種があり、すべて破片である。杯BII(31)はc₀手法で調整する。椀A(30)もc₀手法で調整、底部外面に「主馬」の墨書を持つ。*
両者ともにII群土器。

須恵器 須恵器の器種には杯A・杯B・同蓋・壺G・壺L・壺蓋・鉢C・甕等がある。杯AIV(226)は口縁上部が外反する。底部外面はロクロケズリで調整。I群土器である。杯B I(227)は頂部外面をナデで調整。I群土器。杯BIII蓋(225)は頂部外面をナデで調整する。

vi SD 6151・6152 出土土器

馬寮東官衙の西を限る築地 SA6150の東雨落溝 SD6151と西雨落溝 SA6152から土器が少量出土した。両溝から出土した土器には相互に接合するものがあるため、一括して扱う。出土土器中には若干量の奈良時代末～平安時代初めの資料が含まれるが、多くは奈良時代前半期(平城宮土器II・III)のものである。

土師器 土師器は量的に少ないが、杯A・皿A・壺A・甕等がある。いずれも細片で残りが悪い。*

須恵器 須恵器の器種には杯A・杯B・杯B蓋・皿B・壺A・壺K・壺L・壺Q等がある。I～III群土器があるが、I群が圧倒的多数を占める。杯BIVには、口径がやや大きく口縁部が内彎し、高台の外側面が内傾するもの(220)と、口縁部はほぼ真直ぐ外方に開き、高台が断面矩形で外方に踏んばるもの(221)とがある。両者とも底部外面はナデで調整する。221はI群土器であるが、220はI～IV群のいずれにも属さない。皿BII(222)は底部周縁よりやや奥まった位置に外方に踏んばる低い高台を付す。I～IV群のいずれでもない。杯BII蓋は、いずれも縁部が屈曲しない形態であるが、端部が断面三角形で直角に折れるもの(218)と、端部が丸く収まるもの(217)、端部が「く」の字形に屈曲するもの(219)の3種がある。すべて頂部外面をロクロケズリで調整する。218のみI群土器。図示した以外に杯BII蓋は10片あるが、そのうち7点は転用硯である。*

vii SK 6397 出土土器

馬寮地域西北部で検出した第IV期の二面廂付南北棟建物 SB6400の東廂南端の柱穴を切る小さな円形土壇 SK6397から、完形に近い状態の土器が出土した。平城宮土器Vに属し、SB6400の廃絶の年代の一端が知られる好資料である。

土師器 土師器には杯AI 1点、椀A 2点、杯BI蓋 1点がある。杯AI(26)はII群土器で、c₃手法で調整する。底部外面を一方向に、口縁部外面は水平方向に4回に分けてミガキを施す。椀Aには、小さな平底と底部近くで一旦外反したのち内彎する口縁部からなるもの(27)と、それよりやや口径が大きく口縁部が内彎し外方に大きく開くもの(28)とがある。両者ともにII群土器で、c₀手法で調整する。杯BI蓋(29)は口径26.4cmを測る大型品で、II群土器、c₃手法で調整する。頂部はつまみを四方から挟む形で4回に分け互に直交する方向にミガキを施し、頂部から縁部にかけても4回に分けてミガキを施している。*

viii SK 6350 出土土器

馬寮地域西北部にある南北に細長い大土壙 SK6350から、少量ながらも土師器・須恵器が出土し、遺構の第Ⅲ期の年代を知る上で貴重な資料と考えられる。その大半は細片で、図示できるものは少ない。時期的には平城宮土器Ⅱ～Ⅲに属す。

- * 土師器の器種には杯A・杯C・皿B・碗A・碗C・高杯・甕・竈などがある。杯AI (34) 土師器はI群土器で、a₀手法で調整。口縁部内面に一段の細かい斜放射暗紋を、底部内面には螺旋暗紋を有する。

- 須恵器の器種には杯A・杯B・杯B蓋・皿B蓋・皿C・鉢A・平瓶・壺A・壺A蓋・壺C・須恵器壺K・甕などがある。杯BI (242) はI群土器で、底部をロクロケズリで調整、高台端部は外傾する。杯BIII (243) もI群土器で、底部のヘラ切りをナデで調整している。杯BIII蓋 (239) は扁平で広い頂部と短い縁部からなり、頂部には小さく丸味を有するつまみを持ち、縁部はほぼ直角に折り返す。杯BI蓋には、宝珠形つまみを持つもの(241)と、環状つまみを持つ例(240)とがある。両者ともI群土器で、頂部外面をロクロケズリで調整する。壺A (244) は完器で、平底で肩の張った球形の胴部と、ほぼ真直ぐ立ち上る短い口縁部からなる。口縁端部は内傾し高台は低く外方に踏んばる。底部外面をロクロヘラケズリで、胴部外面はロクロナデで調整する。肩部には自然釉が降着し、蓋をかぶせて焼成した痕跡をとどめる。小型の壺C (245) も完器で、平底と矩形に近い胴部にはほぼ真直ぐ立ち上る短い口縁部がつく。胴部下半から底部外面をロクロヘラケズリで調整する。甕B (246) は胴部以下を欠損するが、口径22cmの比較的小型の甕である。甕C (247) は肩部に半環状の把手を持つ。胴部はヘラケズリで調整するが、部分的に叩き目が残る。胴部内面には墨が付着し磨滅していることから、破片になった後視に転用されたものと判断できる。

ix SE 6166 出土土器

- 第Ⅲ～Ⅳ期の井戸 SE6166から、少量ながら土師器・須恵器が出土した。その中には「主馬」の墨書を持つ土師器杯Aがある。後に詳しく論ずるが、「主馬」は天応元(781)年から大同元(806)年までみえる令外官である主馬寮に相当すると考えられ、今回取りあげている官衙域を馬寮に比定するに際し有力な根拠となる資料である。また編年上においても、既述のように、奈良時代末期の基準資料となっている。土師器・須恵器合わせて総数22点出土しているが(Tab.6)、完形品は少ない。個々の資料については後に述べるが、全体的にみてこれまで平城宮土器Ⅴとしてきた一群よりも長岡宮出土土器に近く、平城京における左京三条二坊十・十五坪の井戸 SE877・967¹⁾出土土器と共通する特徴をもつ。

- 土師器の器種には杯A・杯B・杯C・皿A・皿C・碗A・壺B・甕Aがあり、すべてⅡ群土器である。杯AI (35) は完形で、口径15.2cm、器高3.3cm。b₀手法で調整し、底部外面に「主馬」の墨書をもつ。杯AII (36) は口径15.6cm、器高4.0cmで、c₀手法で調整。底部が狭く、口縁

	器種	点数
土師器	杯 A	1
	杯 B	1
	杯 C	1
	皿 A	2
	皿 C	1
	碗 A	5
	碗 X	1
須恵器	甕 A	2
	杯 A	1
	杯B蓋	1
	杯 CI	1
	高杯	1
器	壺 L	1
	壺 M	1
	甕 A	2
計		22

土師器

Tab.6 SE6166出土土器の器種と点数

1) 『平城京左京三条二坊』(奈良国立文化財研究所学報第25冊) 1975, p.25~27。

部は外傾度が高く内彎する。口縁端部がわずかに内側に肥厚する。椀形態に近い杯である。杯BⅡ(37)は完形で、口径20.5cm、器高7.6cm。器高の割に口径が小さく、径高指数の高い杯Bである。内彎する口縁部と断面逆三角形の小さな高台を付した底部とからなる。c₁手法で調整し、口縁部外面は4回に分けて水平方向に磨く。杯CⅠ(39)は口径18.8cm、器高3.6cmで、a₀手法で調整。皿AⅡよりわずかに大きく、口縁端部が内傾する点を特徴とする。皿AⅡ(40・41)は口径17.2~18.4cm、器高2.5cm前後、いずれもc₀手法で調整する。外傾度の大きい口縁部をもち、口縁端部はわずかに肥厚する。皿C(46)は完形で、口径9.0cm、器高2.3cm、c手法で調整。口縁部は外反し、端部は丸くおさまる。椀Aは口径13cm、器高4.0cm前後で、c₃手法で調整するもの(42・43)とc₀手法で調整するもの(44・45)とがある。後者の口縁部が内彎するのに対し、前者の口縁部は底部近くで一旦外反したのち内彎する形態であり、長岡宮から出土する椀Cと形態を一にする。椀X(38)は底部を欠損するが、口径16.2cmを測る。口縁端部はわずかに内側に肥厚する。c₀手法で調整。甕はいずれも小片であるが、口縁部が大きく外反し端部が外傾する比較的口径の小さいもの(48)と、口縁部が外反し端部を内側に折り返し丸く肥厚させるもの(46)がある。両者とも胴部外面をハケで調整するが、前者は内面を縦方向のヘラケズリで調整するのに対し、後者は胴部内面に当て板痕跡状のくぼみを持ち、粘土紐巻上げ後叩きによって成形したものと考えられる。

須恵器 須恵器の器種には杯A・杯B蓋・杯CⅠ・高杯・壺A蓋・壺L・壺M・甕Aがある。杯Aは底部の破片で、燈明器に用いている。底部外面はヘラ切りそのまま調整しない。I群土器。高杯(250)は杯部を欠損するが、脚台径15.2cmを測る。脚柱部中ほどに2条の沈線を有す。脚柱部内面を縦方向にヘラケズリする。I~IV群のいずれにも属さない。壺L(251)は高台径8.5cm、胴部最大径16.0cm。胴部下位外面をロクロケズリで調整する。底部外面は不調整で、回転糸切り痕をとどめる。焼成堅緻であるが若干焼けひずむ。胴部外面には暗灰緑色の自然釉の降着をみる。東海地方産と考えられる。壺M(249)はロクロ水挽きによる小型壺で、口縁部を欠く。底部径4.6cm、胴部最大径7.2cm。胴部下位をロクロケズリで調整するが、底部外面はヘラ切りのまま不調整である。I群土器。甕A(253)は口径39.0cm、器高45.3cm、卵形の器体と外反する口縁部からなる。口縁部は、一旦斜め上方に立ち上り、端部近くで大きく外反する。外面の叩き、内面の当て板痕跡の切り合いから、上部から下部に向かって叩き出した状況が判る。胴部下位3分の1あたりの断面は周囲に比して肥厚しており、この部分を境に内・外面の当て板叩きの原体を違えている。このふくらみは平底に成形した後底部を叩き出し丸底にした時の名残りと考えられる。I群土器。甕(263)は、胴部下半を欠損するが、口径37.0cmを測る大型の甕である。外面を叩きによって調整するが、肩部と胴部の境をヘラケズリで調整する。I~IV群のいずれにも属さない。東海産か。

x 漆附着土器

総数675点にのぼる漆附着土器が出土した。各地区毎の出土点数をTab.7に表示した。これによって漆附着土器の出土状況を見ると、第50次調査区(6ADD-N・M区)と、それに接する第71次調査区(6ADD-N区)とに集中する傾向があり、総個数の93%がこの地域

地区	点数
6ADC-G区	1
H区	5
K区	2
O区	14
P区	14
6ADD-L区	7
M区	86
N区	501
P区	33
Q区	12
計	675

Tab.7 漆附着土器出土地点

から出土している。ほとんどすべてが破片であり、器種の判別可能なものは少ないが、Tab. 8にみるように圧倒的に須恵器が多い。須恵器では甕片が最も多く、ついで杯類、壺、横瓶、杯B蓋、壺蓋、皿A、皿Bの順となる。甕で器種が判別できるものには、甕A(1点)、甕B(3点)、甕C(1点)がある。壺類のうちわけは壺A(1点)、壺B(1点)、壺G(1点)、壺K(1点)、壺L(2点)、壺Q(2点)である。杯類は杯A(18点)、杯B(18点)、杯E(2点)である。

土師器の器種はすべて供膳形態であり、貯蔵形態はない。

以上の漆付着土器は、壺・甕は貯蔵容器として、杯・皿類はパレットとして使用されたものであろう。これら漆付き土器が馬寮域の東南部から集中的に出土することから、このあたりに馬寮に所属する漆工房の存在していた蓋然性は極めて高いと言えよう。

	器種	点数
土師器	杯	4
	杯B	1
	皿A	5
	不明	4
須恵器	杯	74
	杯B蓋	13
	皿	2
	壺	97
	壺A蓋	6
	横瓶	17
	甕	392
計		615

Tab. 8 漆付着土器の器種別個体数

xii 墨書土器

総数24点の墨書土器が出土した。このうち遺構に伴った例は、SE6166・SD6499から各2点、SD6160・6477・6151・5960から各1点の計8点であり、他は遺物包含層からの出土にかかる。

墨書土器の分布状況は転用硯のそれとほぼ一致している。すなわち墨書土器の多くは第III期における馬寮の東限界SA5950より以東の地域から出土しており、特にその北部に集中する傾向が認められるのである。SA5950以西では、わずか7点しか出土していない。判読可能なものは13点あり(Tab. 9)、中でも「主馬」・「内廩」の墨書は、当地域が馬寮であったことを示す貴重な資料である。

番号	出土地	墨書	器種・部位	時期	番号	出土地	墨書	器種・部位	時期
35	SE6166	主馬	土師杯AI 底外	平城宮土器V	227	6ADC-G	判読不能	須恵杯か皿底外	
50	"	判読不能	土師坏か皿 底外		219	"	八	" 壺G胴部外	
30	SD6160	主馬	" 椀A 底外	平城宮土器V	228	6ADC-H	判読不能	" 杯 底外	
215	SD6477	井	須恵杯BIV蓋 つまみ頂部	"	229	"	授授	" 杯B蓋頂外	
220	SD5960	代王	" 杯A 口縁外	平城宮土器II	230	"	水	" 壺 底外	
221	SD6499	因口	" 杯B 蓋頂外		232	6ADC-K	備	" 杯 底外	
222	"	廩	" 杯A 底外		232	"	判読不能	" 杯 底外	
51	SD6152	判読不能	土師杯AI 底外	平城宮土器V	233	6ADC-L	宮	" 坏 底外	
223	6ADC-G	"	須恵杯B蓋 頂外		217	6ADC-M	判読不能	" 皿A底内外	
224	"	太	" 杯BIV蓋頂外		216	6ADC-P	(記号)	" 杯AIII外面	
225	"	右カ	" 杯 底外		234	"	内廩	" 坏B蓋頂外	
226	"	判読不能	" 杯B 底外		218	"	内	" 杯C 底外	平城宮土器II

Tab. 9 墨書土器一覧

xiii 特殊土製品

特殊土製品としては祭祀に使われた土馬・甕形土製品、土錘、硯が、また特殊土器としては三彩陶器等がある。

* 土馬 土馬は破片も含めて4点出土している。遺構に伴うのは1点で、他の3点は包含層

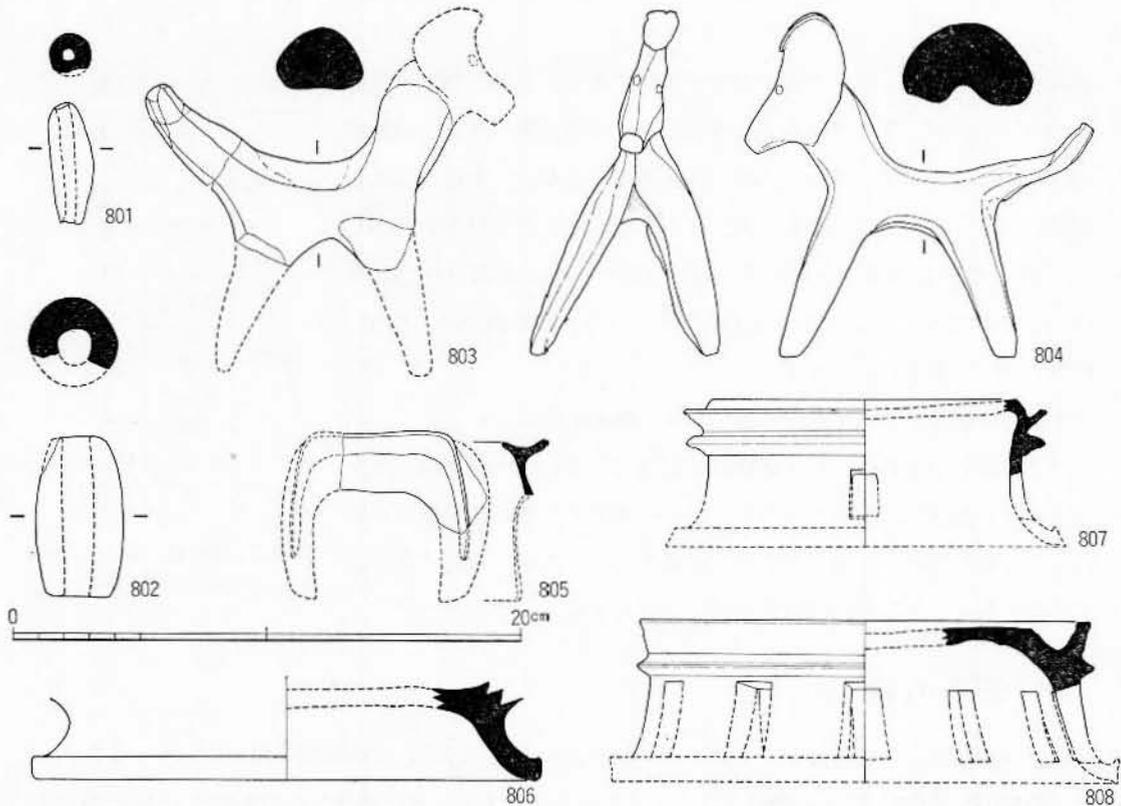


Fig. 48 特殊土製品実測図

から出土した。804は東西溝 SD6499から出土した完形品で、前足・後足とも逆V字形に開き、首をもたげ、胴部が短く、尾は先端を細め斜め上方にはね上げる。粘土塊から前足・後足・尾・首の部分それぞれつまみ出し、前後の足を適当な開き具合に内側に折り返したあと、頭部・腹部をナデで調整する。手綱・鞍の表現がなく、裸馬を表わしたものである。803は804とほぼ同様な形態を持つ土馬であるが、前足・後足・頭部を欠失する。全体に肉太で、腹部はナデによってくぼむ。6ADD-N区出土。他の2点は肢部の破片で、6ADC-H区から出土している。

土錘 土錘は南北溝 SD6152から1点(802)、6ADD-N区から1点(801)、計2点出土した。どちらも土師質の紡錘形で、棒状の芯に粘土紐を巻きつけて作った粗製品である。802は長さ6.4cm、最大径3.4cm、中心に径1cm前後の孔が通る。801は粗い調整で断面は正円形をなさない。長さ4.8cm、最大径1.6cmの細長い形態である。

竈形土製品 手捏ねで作った土師質の小型竈(805)で、下底が広い台形状の体部の一個所を篋で切りとり焚口とし、周辺に粘土紐を貼り付け廂をつくる。南北溝 SD6160出土。

硯 出土した陶硯は台付円面硯2点のみである。どちらも破片であるが、陸と海の区別が明瞭な圈足硯であり、外堤外部下端に1条の突帯を、また脚台部に長方形透しを配す。808は6ADD-M区の包含層から出土したもので、器壁が厚く、外堤部が陸部より突出する。脚台部の透しは縦長の長方形で、11ないし12個に復原できる。807は6ADD-L区の包含層から出土したもので、全体に器壁が薄く作られている。外堤部は陸部より低く、外堤部下位に太い突帯が巡る。脚部台の透しの数は不明だが、3~4個程度と少ないようだ。

三彩陶器 破片1点が6ADD-P区の包含層から出土した(303)。大型の瓶の脚台部の破片で、外面と底部内面に緑釉と褐釉が部分的に残る。白色の緻密な水簸粘土を使用しているが、扶雑物として長石・雲母・チャートの微砂を含む。

C 平城宮廃絶後の土器 (PL. 63~65, Fig. 49・50)

9世紀初頭、平城上皇が再び平城の地に還都し、旧馬寮城にも掘立柱建物群が建てられる。

- * 遺構の上では第V期に相当し、建物は調査区北部に集中するが依然官衙的な性格を保持しているように思われる。この時期に属する遺物は極めて少なく、遺構に伴うものはほとんどない。

第V期の終末以降、宮あるいは官衙的な性格は消失し、旧馬寮城を含む西一坊大路東辺一帯には集落が営まれるようになり、14世紀中頃まで続いたと思われる。第V期以降の土器類はこれらの集落に住んだ人々が残したものであるが、14世紀後半頃から始まったたび重なる開田耕

- * 作のため、その大半は遺構から遊離し、包含層中に含まれることになった。遺構に伴った例は、井戸や土壙等深く掘り込まれたものから出土したものに限られる。第V期以降の土器類には、土師器、黒色土器、瓦器、須恵器、灰釉陶器、白瓷系陶器(山茶碗)、輸入陶磁器(青磁・白磁等)がある。ここでは主として遺構出土品を取り上げ、包含層から出土した灰釉陶器・白瓷系陶器・輸入陶磁器については節を改めて述べることにしたい。

i SK 7040 出土土器

*

SK7040は馬寮城南辺のSB7027など小規模な掘立柱建物集中する一画の東北に接して掘られた土壙である。奈良時代の土壙SK7041を切って掘られているため、SK7041の遺物も含んでいるが、大半は平安時代(10世紀末葉)の土器類である。これらは近辺の建物で生活した人々が投棄した遺物と考えられる。

- * 出土した土器の多くは細片で、図示できる資料は少ない。土師器には皿と鏝釜がある。皿には口径15.8cm程度で口縁部が外反し端部がわずかに肥厚するⅠ類(51)と、口径10.9cm、器高1.4cm程度の小皿で、口縁部が外反気味に開き端部が丸くおさままるⅡ類(50)、および口径10cm、器高1.5cm程度の小皿で、口縁部が大きく外反し端部が丸く肥厚するⅢ類(48・49)がある。Ⅰ類が胎土に多くの砂粒を含むのに対し、Ⅱ・Ⅲ類はまったく砂を含まない胎土で薄く作られているが、ひずみを持つ。Ⅰ類1個体、Ⅱ類1個体、Ⅲ類は10個体以上出土した。

- * 黒色土器にはA・B兩種があり、A類には碗と鉢がある。A類の碗(303)は口径15.1cm、器高6.4cm程度の大きさで、外方に踏んばる比較的長い高台を持ち、底部近辺から急激に内彎気味に立ちあがるのを特徴とする。径高指数42程度。器壁は比較的厚く、口縁部外面は丁寧なヘラケズリで調整する。図示したものについては、器面が荒れているため、ミガキの有無は定かでない。別の破片では、口縁部外面に粗いヘラミガキを加えた例がある。口縁部内面・底部内面については粗いヘラケズリを施す。高台部・底部にはヘラミガキはない。B類碗(304)の形態は基本的にはA類と同様であるが、調整手法が異なり、内外面とも細かく丁寧なヘラミガキを施している。A類碗は3個体、B類碗は2個体以上出土している。A類の鉢(305)は底部を欠損するが、獣足が付いていた痕跡を有する。内面は丁寧にヘラミガキを施すが、外面はケズリ調整のみでミガキがない。同種の鉢は薬師寺西僧房から出土している。

- * 須恵器の器種には甕・鉢・壺があるが、いずれも細片である。鉢の口縁部は内彎気味に外方に開き、端部が玉縁状に丸くふくらむ。口縁部外面は不調整でロクロ目の凹凸をとどめ、底部

外面も不調整で糸切り痕が残る。

以上の他に灰釉陶器の長頸瓶の破片が1点出土している。

ii SK 7097 出土土器

佐伯門 SB3600の近くにある東西方向に延びる長方形土壇 SK7097から、少量ではあるが、土師器・黒色土器・須恵器等が出土した。これらは、SD650B様式の後に続く型式である。*

土師器 土師器の器種は杯A (70~74) のみで、約12個体ある。いずれも調整は口縁部上端のみを強くヨコナデするe手法によるもので、c手法によるものは皆無である。法量はほぼ同一で、口径14.4~15.0cm、器高3.0~3.2cmである。74は蒸籠として使用したもので、焼成後底面に小さな穴を穿孔している。

黒色土器 黒色土器には碗と甕がある。碗は小片で外面の器面が剥落しているため、ヘラミガキの有無は不明。内面には粗いヘラミガキを施す。甕(302)は平底で高台を持ち、外反する短い口縁部と長胴で内彎する体部からなる。体部外面にはヘラケズリを、内面には横方向のハケ目調整を施し、胴部上半部にのみ横方向のヘラミガキを加える。(301)は胴部上半を欠失し、やや小さいが302とはほぼ同一形態で、調整も同様である。*

須恵器 須恵器はすべて甕の小片で、奈良時代のものである。*

iii SE 7094 出土土器

SK7097の南約3mの位置にある石組井戸 SE7094から、土師器の杯1点、皿1点、灰釉陶器皿1点が出土した。SK7097より新しい時期のものである。

土師器 土師器杯(68)は口径13.4cm、器高2.8cm、口縁部上位が外反し、端部はわずかに丸く肥厚する。皿(69)は口径10.0cm、器高1.2cmと小型である。口縁部上位が外反し、端部を上方につまみあげわずかに肥厚させている。両者ともe手法で調整。口縁部外面には粘土紐の巻き上げ痕跡を残す。*

灰釉陶器 灰釉の皿(500)は口縁部上半を欠失するが、底部には低短な角高台が付つ。外面はロクロケズリで調整。灰釉は内面にのみ施し、暗黄緑色を呈す。この灰釉皿は前述の土師器よりも古い時代のもので黒笹14号窯型式に属す。*

iv SB 7060 出土土器

SB7060の柱掘形から少量の土師器・黒色土器・灰釉陶器の破片が出土した。土師器の器種には小皿がある。黒色土器にはSK7040と同様の碗と獣足の付く鉢、把手付甕、高台の付く大鉢等がある。黒色土器A碗(300)は器面が荒れていてミガキ等の調整は定かでない。灰釉陶器には碗(502)があり、口縁部外面をヘラケズリ調整せず、底部に糸切り痕跡を残すなど、末階段階灰釉陶器の諸特徴を備えている。焼成が甘いため、灰釉は灰白色に発色している。*

v SB 5958 出土土器

小規模な掘立柱建物 SB5958の柱穴から、黒色土器B類の碗2点と瓦器の小碗1点が出土した。黒色土器B類碗(312)は口径16.5cm、器高6.1cm、外方に開く比較的高い高台部近くから*

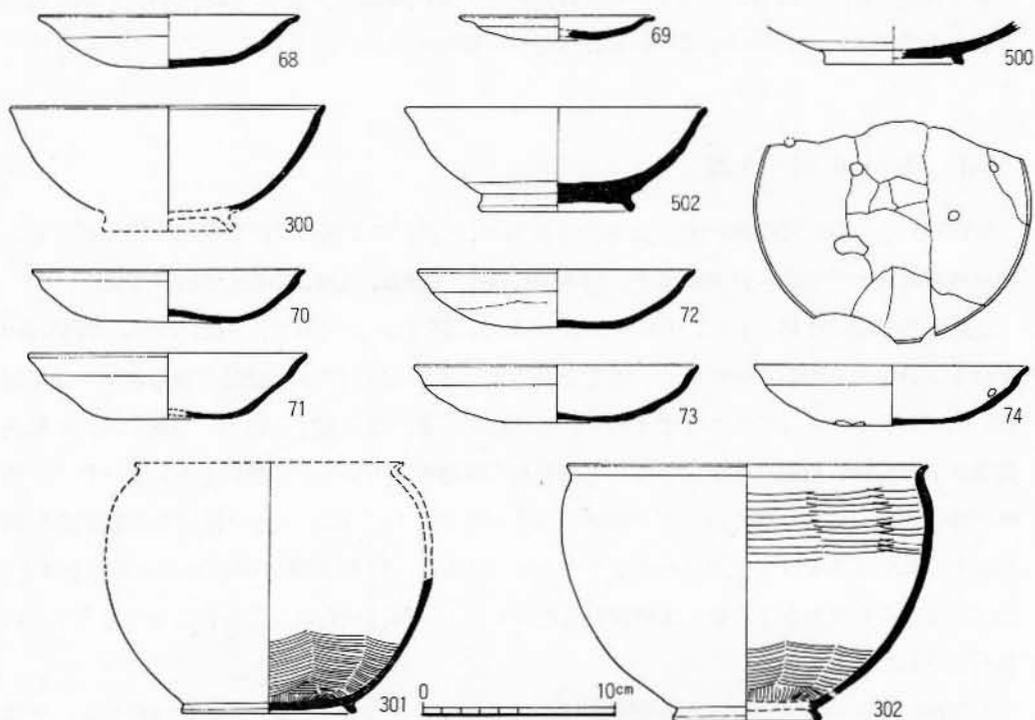


Fig. 49 SK7097・SK7094・SB7060出土土器

内彎気味に立ち上る口縁部で、端部が丸くおさまる。口縁部外面には4回に分け水平方向のミガキを、口縁部内面には連続回転ヘラミガキを施し、底部内面は一方向に粗くミガキを施している。底部外面・高台部にはヘラミガキを施さない。胎土は、SK7040やSB7026出土の黒色土器Bに比して砂っぽい。同小碗(311)は口径9.4cm、器高4.1cmで、外方に踏んばる高台をもち、口縁部は下半から急に立ち上る。調整法・胎土は312と共通する。

* ち、口縁部は下半から急に立ち上る。調整法・胎土は312と共通する。

瓦器の小碗(400)は口径10.3cm、復原高4.1cm。高台を欠損するほかはほぼ完存する。口縁部外面上位の一部にヘラミガキが認められるが、以下の部位は器表面が剥落し、ミガキの様子を観察できない。口縁部内面は瓦器特有の回転ヘラミガキ、底部内面は直交する2方向にミガキを行なうが、底部全面には及ばない。灰白色の水簸粘土を胎土とする。

瓦器

* vi SB 7026 出土土器

SB7026の柱穴から黒色土器A類の碗5個体、B類の碗1個体が出土した。後節で詳しく述べるが、これらすべては薬師寺西僧房床面土器の後に比定される型式であり、SB7026の年代を考えるにあたって貴重な資料となった。

A類碗(306~309)は口径15~16cm、器高5.6~6.3cm。いずれも口縁部は底部近くから急激に内彎しつつ立ち上る形態で、内面の端部やや下位に浅い沈線もしくは段を有する。高台は比較的高く、外方に大きく開く。外面にはヘラケズリを施すが、308・309は口縁部上位を削り残り、ヨコナデ痕をとどめる。器面が荒れているため外面のヘラミガキの様子は定かでないが、308には横方向の粗いヘラミガキ痕が認められる。いずれも口縁部内面には連続回転ヘラミガキを施すが、総じて粗雑で、308のようにミガキの前段階で行なったヘラ状器具によるハケメ調整痕をとどめた例もある。

B類の碗(310)は高台を欠損するが、A類のものとはほぼ同一法量で、細長く外方に開く高台を持つと考えられる。口縁部はA類と比べやや直線的であり、内外面のヘラミガキも密である。

vii SE 6146 出土土器

6ADD-Q 区のSB3690の屋内にあたる位置に、相接して2基の井戸SE6135・6146がある。*
共に縦板組みで平安時代後期に属す。SE6146からは土師器、瓦器、白磁片が出土した。

土 師 器 土師器の器種には杯(1点)、小皿(2点)がある。杯(52)は完形で、口径14.8cm、器高3.5cmを測る。口縁部上端がやや屈曲し、端部を上方につまみ上げわずかに肥厚させる。e手法で調整、内面のヨコナデは底部にまで至らず、底部は単にナデで調整するのみ。口縁部外面に粘土紐巻き上げ痕跡、内面にコテを使用して調整した痕跡をとどめる。小皿はどちらも小片で、内*
彎気味に大きく外方に開く口縁部で端部の丸くおさまるもの(55)と、口縁部上端が屈曲し端部を上方につまみ上げて肥厚させたタイプ(56)がある。後者はSE7094のⅢ類の系統をひく。55は灰褐色系の発色を示し胎土に砂粒を含むのに対し、56は灰白色に発色、砂を全く含まないねっとりした胎土である。

瓦 器 瓦器碗は約8個体分あり、うち完形品は2点(401・404)である。401・404はほぼ同一法量*
で、口径15.4cm、器高6.7cm、両者ともに外方に開く低短かつ太目の高台を持ち、口縁部外面に底部から口縁部に向って横方向のヘラミガキを3回に分けて施す。口縁部内面には水平方向の連続回転ヘラミガキを、見込み部分にはジグザグミガキを施す。401の口縁部外面および見込部のミガキは404に較べ粗い。402は底部を欠失するが、401と同様な調整法である。406は前述したものに較べ、口縁部があまり内彎せず、高台も細く高い。見込部分には互いに直交する*
2方向からジグザグミガキを施し、格子状に見せている。403は口縁部上位を欠くが、406と同様な高台を持ち、底部の中央付近に小さな突帯を巡らした珍しい例である。見込み部分には比較的細かいジグザグミガキを施す。405は口径18.2cmを測る大碗で、口縁内面上位には沈線がなく、端部も丸くおさまり、伴出した瓦器碗と形態を異にする¹⁾。口縁部外面には3段にわたって強いナデの痕跡を残すが、器表が荒れているため内外のミガキの有無は定かでない。胎土は*
他の瓦器碗と同様に水簸した白色の粘土である。小皿は小片で図示できないが、口縁部内面には横方向のヘラミガキを、見込み部分にはジグザグミガキを施している。外面にはヘラミガキはない。

viii SE 6135 出土土器

SE6146の東南に接して存在する井戸SE6135からも少量の土師器・瓦器が出土した。*

土 師 器 土師器の器種には小皿と罏釜各1点がある。小皿(54)は白色を呈し、よく焼き締まっている。胎土は比較的ねっとりした粘土に粗砂を若干まじえる。口縁部上端のみをヨコナデ調整、底部内面はナデで調整。罏釜(53)は頸部よりやや下位に幅2cmほどの罏を付す。内縁端部は内外に折り返し丸く肥厚する。罏の上下はヨコナデし、その他の外面はナデで調整。胴部内面はヘラケズリで調整。*

1) 同様な大碗は薬師寺から出土している。『昭和58年度平城宮概報』p.62。

瓦器碗(407)は完形品で、口径15.2cm、器高6.0cm。法量的にはSE6146出土の瓦器碗と同瓦器
じであるが、外面のミガキはそれより粗く、また底部内面の見込み部分のジグザグミガキは粗
雑である。SE6146の碗に比べ後出的な様相をもつといえよう。碗にはこの他、口縁部を欠失
するが、見込みに多重の螺旋暗紋を施した破片が1点ある。

* ix SK 6470 出土土器

SB6430の東側にある円形土壙SK6470から少量ではあるが土師器・瓦器が出土した。土師器
には皿(4片)、罏釜(1片)が、瓦器としては碗(5個体分の破片)と小皿(2点)がある。時期
的にはSE6135より後出の型式である。

土師器皿には口径12.4cm、器高2.8cm程度の中皿(58)と、口径9.4cm、器高1.9cm程度の小土師器
* 皿(57)がある。両者ともに灰白色を呈し、胎土に若干の砂粒を含み、堅く焼き締まっている。
いずれも口縁部上段をヨコナデ、底部内面をナデで調整する。

瓦器碗には口縁部がゆるやかに内彎する曲線で端部に至るもの(410)と、端部近くで急激に瓦器
立ち上るもの(411~413)とがある。両形態とも高台の断面は三角形だが、前者は後者に比べ
高く大きい。すべて口縁部外面に横方向の粗いヘラミガキを3回に分けて施す。口縁部内面
* の連続回転ヘラミガキは密であるが、見込みのジグザグミガキには細かいもの(410)とやや粗
いもの(413)と差が認められる。小皿は口径10cm、器高2cm程度で、口縁部上位が外反する。
口縁部内面に水平方向のミガキ、見込み部分にジグザグミガキを施すが外面にはない。

x SK 6508 出土土器

SK6470の東方約12mの位置にある土壙SK6508から、SK6470よりやや古い時期の土師器・
* 瓦器が出土している。

土師器の器種には皿AⅠと皿AⅢがある。皿AⅠにはさらに口縁部が内彎気味に外方に開く土師器
もの(59)と、外反気味に開くもの(60)の2種がある。いずれも口縁部外面をヨコナデする
が、底部内面はナデで調整する。皿AⅢもまた、やや外反気味に外方に開くもの(61)と、口
縁部が大きく屈曲し端部を上方につまみ上げて丸く肥厚させたもの(62)とがある。

* 瓦器碗(415)は口径15.4cm、器高6.2cm。口縁部外面のミガキは3回に分けて、高台のすぐ瓦器
上方からほとんど隙間なく密に施す。見込部のジグザグミガキは粗い。高台は断面三角形状
で比較的大きい。同碗(414)は口径14.4cm、器高5.9cmで、415に比べ幾分小型である。口縁
部外面のヘラミガキが粗く、反対に見込み部のジグザグミガキは細くて密である。底部には断
面三角形の小さな高台を付す。

* xi SK 6509 出土土器

第Ⅳ期の掘立柱建物SB6430の東妻柱列の柱掘形(ニイ)を切る円形土壙SK6509から、12世
紀前半期の土師器・瓦器が出土した。

土師器の器種には皿AⅡ(1点)、同AⅢ(4点)がある。皿AⅡ(67)は口径15.0cm、器高土師器
2.3cmでやや外反気味に外方に開く口縁部を持ち、口縁部上端のみをヨコナデ調整する。皿A
* Ⅲには、AⅡを小型にした形態のもの(63・65・66)と、口縁部が内彎気味に立ち上るもの(64)

とがある。前者は灰白色、後者は赤褐色を呈する。

瓦 器 瓦器には椀（7個体）と小皿（1個体）がある。椀（416~420）は皆ほぼ同一法量で、口径が14.8~15.0cm、器高5.2~5.5cmである。断面逆三角形を呈す小さな高台を持つ。口縁部内面の沈線も端部近くに存在し、内面のヘラミガキも粗い。内面見込部のミガキは暗紋風に変化し、螺旋状を呈す。小皿（421）は口径9.3cm、器高1.7cmで、外方に開く口縁部を持つ。口縁部内面には横方向のミガキ、底部内面にはジグザグミガキを施す。*

D 施 釉 陶 器

施釉陶器は、土師器・須恵器に比べ量的には少ないが、灰釉陶器・緑釉陶器・輸入陶磁器（青磁・白磁）がある。多くは遺物包含層から出土したもので、遺構に伴ったものは極めて少数である。*

i 灰釉陶器・白瓷系陶器

灰釉陶器は総数65点出土したが、大半は小片で図上復原できるものは少ない。器種としては、椀・皿・唾壺・長頸瓶・広口瓶などがあり、椀・皿が多数を占める。これらは、胎土・形態・調整手法等からみて、後述する2点以外はすべて東濃産と考えられる¹⁾。*

灰釉陶器の大半は包含層から出土したもののだが、比較的まとまりのある分布状況を示す。すなわち6ADD-N・G区に集中しており、ここはSB7024等の小規模建物が密集する箇所¹⁾の東側にあたり、また井戸SB7094や長方形土塙SK7097にも近い。出土した灰釉陶器は、美濃地方の灰釉窯の編年に従えば、光ヶ丘1号窯式→大原2号窯式→虎溪山1号窯式の3型式にわたる。

9世紀前半 9世紀前半代のSD650A型式は少なく、馬寮北辺のSB6430周辺からわずか2点しか出土していない。椀（545）は口縁部を欠失するが、腰の張る形態の小椀である。断面方形の高台が付く。刷毛によって内面にのみ施釉し、見込み部分には三又トチンの当りを残す。外面には丁寧なロクロケズリを施す。皿（546）は、低短な角高台をもつ平底と内彎気味に外方に開き端部近くでわずかに外反する口縁部からなる。釉は546と同様刷毛により内面にのみ施す。外面のロクロケズリは口縁部の上位にまで及ぶ。両者は愛知県小牧市に所在する篠岡窯の産と見られる。*

光ヶ丘窯式 光ヶ丘窯式にあたるものには、椀・皿・唾壺・長頸瓶などがある。椀（517）は、口縁部の外面数カ所に篋を押しつけて花卉状に見せる輪花椀である。口縁部は内彎し、端部近くで外反する。高台は比較的細長く、外側面が外傾し内側面が内彎するいわゆる「三日月型」高台である。外面はロクロケズリで調整し、釉は刷毛により内外両面に施すが、底部外面には施釉しない。皿（518・519）は、内彎気味に大きく外方に開き端部間近で外反する口縁部で、椀に比べて低短で太い三日月型高台を有する。口縁部上位を除く外面をロクロケズリで調整し、刷毛により口縁部内外面に施釉する。518は見込み部分にも施釉している。唾壺（548）は、残存する部分には釉がかかっているが、ヘラミガキはなく、緑釉の生地とは思われない。体部と底部の境を一段くぼめて切高台風に見せている。底部および体部外面をロクロケズリで調整。長頸瓶（525）は胴部以下を欠失するが、外方に開く比較的短い頸部と外反する縁部が残る。口縁端

1) 灰釉陶器の産地・時期は斎藤孝正氏（名古屋大学文学部助手）の教示による。

遺物番号	出土地点	器種	外面ヘラケズリの有無		釉掛け法	時期
			口縁部	底部		
500	6ADD-Q (SE7097)	皿	有	有	刷毛	K-14
501	"	"	有	—	"	—
502	" (SB7060)	碗	無	無	漬け掛け	虎溪山
503	"	碗	有	"	—	大原2
504	"	"	"	"	漬け掛け	"
505	"	"	"	"	"	"
506	"	"	—	有	"	"
507	"	"	有	"	—	光ヶ丘
508	"	"	"	"	漬け掛け	大原2
509	"	"	無	—	無釉	—
510	"	皿	—	—	漬け掛け	—
511	"	碗	—	有	—	—
512	"	"	—	—	—	—
513	"	皿	有	有	漬け掛け	大原2
514	"	"	—	"	—	—
515	"	把手付瓶	—	—	—	—
516	"	碗	有	—	漬け掛け	—
517	"	輪花碗	"	有	刷毛	光ヶ丘
518	"	皿	無	有	"	"
519	"	"	有	有	"	"
520	"	"	"	"	"	"
521	6ADD-N	碗	無	"	漬け掛け	大原
522	"	"	"	無	"	虎溪山
523	"	"	"	"	—	—
524	"	広口瓶	—	—	—	—
525	"	長頸瓶	—	—	—	光ヶ丘
526	"	広口瓶	—	—	—	—
527	"	碗	無	—	無釉	光ヶ丘
528	"	長頸瓶	—	有	—	—
529	"	碗	無	無	—	—
530	"	"	"	"	漬け掛け	虎溪山
531	"	"	"	"	"	"
532	"	"	"	—	—	—
533	"	段皿	"	—	—	光ヶ丘
534	6ADD-R	碗	有	有	—	—
535	6ADD-L	"	—	—	漬け掛け	—
536	6ADC-H	小碗	無	無	—	—
537	"	碗	有	—	—	—
538	"	段皿	"	—	—	—
539	6ADC-G	碗	無	無	無釉	西阪
540	"	瓶	—	—	—	—
541	6ADC-N	碗	無	無	—	丸石
542	6ADC-P	碗	有	有	漬け掛け	—
543	6ADC-L	瓶	—	—	—	—
544	"	段皿	有	有	刷毛	光ヶ丘
545	"	小碗	"	"	"	K-14
546	"	皿	"	"	"	"
547	"	手付瓶	—	—	—	—
548	"	唾壺	—	—	—	光ヶ丘

Tab. 10 馬寮地域出土灰釉陶器一覧

部を一旦内側に折り反し、さらに上方に小さくつまみ上げてある。灰釉長頸瓶としては特異な口縁形態であり、猿投窯では今の所類例見出し難く、胎土から美濃産と判断した。灰釉は口縁部および頸部外面と口縁部内面の上位に施されている。528 は長頸瓶の底部破片で、底部外面と残存する胴部外面をロクロケズリで調整する。

* 大原2号窯式に属するものには碗・皿がある。碗(504・505)は、いずれも外方に踏んばる比較的高い断面矩形に近い高台を持つ。底部外面と底部よりやや上位の口縁部下位をロクロケ

大原2号窯式

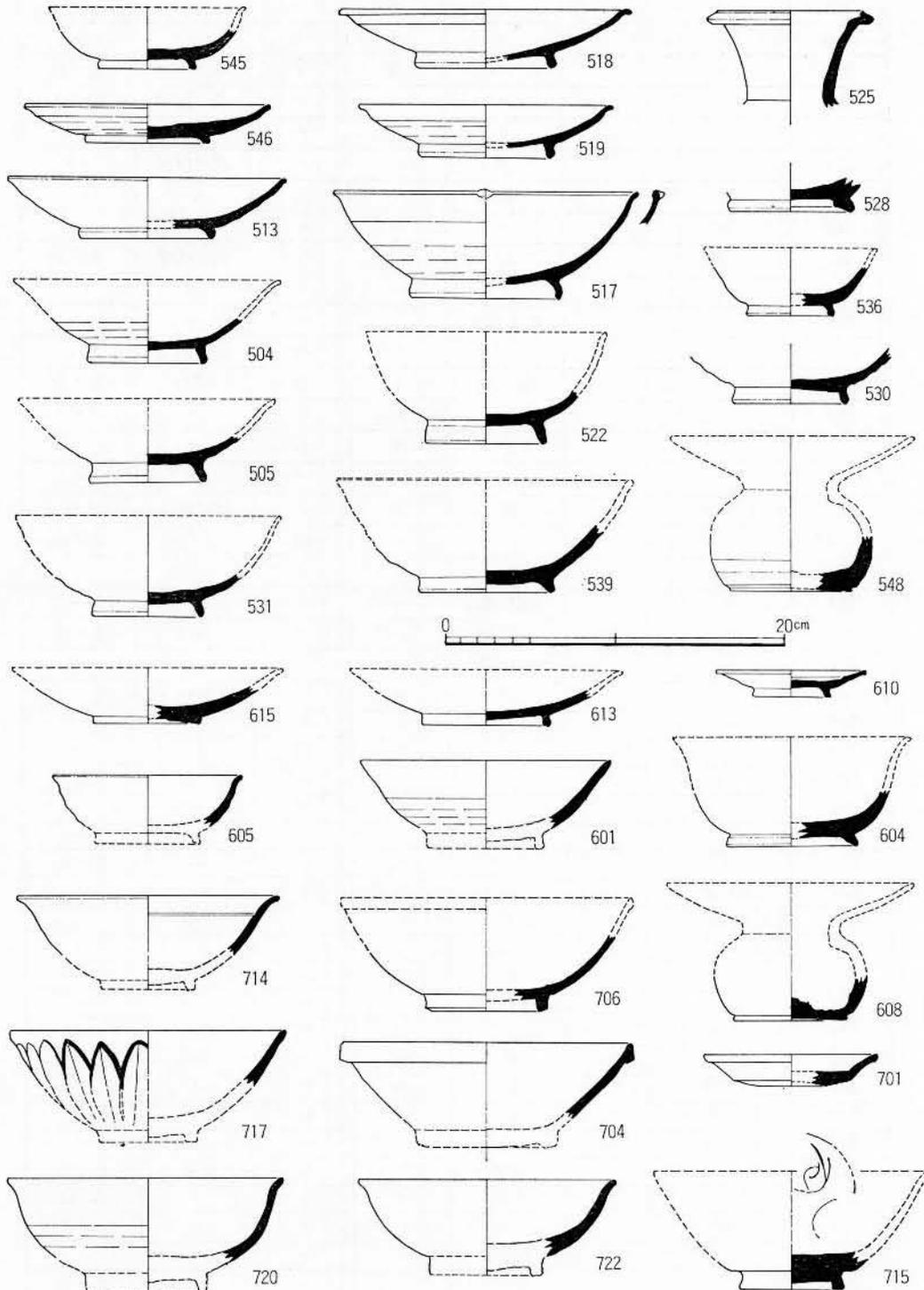


Fig. 50 施釉陶器実測図

ズリで調整。口縁部中位から上位にはロクロ目が残る。釉は漬け掛けにより口縁部内外面に施す。皿(513)は外方に開く低短な高台を持ち、口縁端部は丸くおさまる。漬け掛けにより口縁部内外面に施釉する。椀と同様、口縁部下位から底部外面をロクロケズリで調整する。

- 虎溪山1号窯式にあたるものとしては椀類がある。531は八の字形に外方に開く高い高台と腰部からほぼ真直ぐ立ち上る口縁部からなり、深椀の形態である。外面が不調整で、口縁部外面にはロクロ目を、底部外面には糸切り痕をとどめる。釉は漬け掛けにより口縁部内外面に施す。536は小椀で、内面に暗灰緑色の釉が掛る。

虎溪山1号
窯式

以上のほか、白瓷系陶器、いわゆる山茶椀も一点出土している(539)。灰釉陶器と同じく美濃産と目され、中でも西阪窯式の子茶椀に近い形態をもつ。

山茶椀

* ii 緑釉陶器

緑釉陶器は包含層から総計16点が出土した。緑釉陶器も灰釉陶器と同様、小規模な掘立柱建物が集中分布する6ADD-Q・N区周辺から出土している(Tab.10)。

- * 緑釉陶器の器種には椀・皿・唾壺がある。605は口径11.2cm前後に復原できる小椀であり、内彎する口縁部は端部近くで外反する。外面は不調整でロクロ目をとどめ、内外面に濃緑色の釉が掛る。生地は暗灰色～灰褐色を呈する硬陶で、近江産と考えられる。601は口径1.15cm程の椀で、底部近辺が内彎し、それより上位が外反気味に開く口縁部をもつ。口縁部は丸くおさまる。口縁部外面下半をロクロケズリで、上半をロクロナデで調整し、内面にはヘラミガキを施す。内外面に薄黄緑色の釉が掛る。灰白色の胎の硬陶である。604は八の字形に外方に開いた高台が付く平底と、外傾度の小さい口縁部からなる深椀の破片である。高台内側面はくの字形に屈曲する。底部内面には三叉トチンの痕跡、釉下に生地焼成時に生じた重

遺物番号	出土地点	器種	焼成	産地
600	6ADC-G	椀	軟陶	
601	"	"	硬陶	
602	6ADC-L	段皿	"	
603	"	小椀	軟陶	近江
604	"	椀	"	"
605	"	小椀	硬陶	"
606	"	"	"	"
607	"	椀	"	"
608	"	唾壺	"	
609	6ADD-L	椀	軟陶	
610	6ADD-N	段皿	硬陶	東濃
611	"	小椀	軟陶	
612	"	稜椀	硬陶	
613	"	皿	"	東海
614	6ADD-L	"	"	京都
615	6ADD-Q	"	"	"
616	"	"	軟陶	

Tab. 11 緑釉陶器一覧

- * ね焼きのあたり・輪状痕跡をとどめる。全面に暗濃緑色の釉が掛る。暗灰色の胎の軟陶である。615は切高台の皿で、底部中央部が一段深く円形にケズリ出したいわゆる蛇ノ目高台を持つ。口縁部・底部外面をロクロケズリで調整し、内面にはヘラミガキを施す。釉の残りが悪く、口縁部内外面に部分的に遺存するに過ぎない。白色の粒子を多量に含む灰色の胎の硬陶である。613は断面矩形を呈する貼付高台を持った皿の破片で、底部外面と口縁部下半のみをロクロケズリで調整。全面に薄緑色の釉が掛る。暗灰色の胎の硬陶で、東海産と考えられる。610は口径9.6cm、器高1.5cmの小型の段皿で、外方に踏んばる細い高台を付した平底と、外反気味に外方に開く口縁部からなる。口縁部内面に浅い段を持つ。底部外面はナデにより、口縁部

外面はロクロナデで調整する。釉の残りが悪く、内面と口縁部外面、高台部外面に部分的に残る。灰白色の胎の硬陶で、東濃産と目される。608 は唾壺の下部の破片である。底部外面周辺部と体部にロクロケズリを施すが、底部中央部には及ばず糸切り痕をとどめる。青味の強い薄緑色の釉が外面全面に掛る。内面底部にも一部釉の発色が認められる。

iii 輸入陶磁器

出土した輸入陶磁器は総数26点ある。そのうちわけは青磁片10点、白磁片15点、雑陶1点で、遺構に伴ったものはわずかに1例(700)、他はすべて包含層からの出土にかかる。出土地点はTab. 11のとおりで、分布上特に顕著な傾向は認められない。時期的には11世紀から15世紀にわたる。多くは細片であり、器種さえ不明なものがある。

青磁 青磁はすべて龍泉窯系であり、その器種には碗と、器形は不明であるが貼花による唐草紋を持つ破片などがある。碗には、蓮弁紋を口縁部外面に片彫りするものと、無紋のものがある。蓮弁紋にはさらに、弁に鎬を持つもの(717)と持たないものの2種がある。他に蓮弁の形態は詳かでないが、見込みに花紋を片彫りしたもの(715)もある。無紋の碗(714・720)はいずれも口縁部上端が外反する形態で、714は口縁部内面に一条の沈線をめぐらせる。

遺物番号	地区	種別	器種
700	SE6146	青白磁	碗
701	6ADD-N	"	皿
702	"	青磁	碗
703	6ADD-O	"	不明
704	6ADD-P	白磁	碗
705	"	灰釉	壺
706	6ADD-Q	白磁	碗
707	"	"	"
708	"	"	"
709	"	"	"
710	"	"	"
711	6ADC-L	"	切立香炉
712	"	"	壺
713	6ADC-K	青磁	碗
714	6ADC-N	白磁	"
715	"	"	"
716	6ADC-G	青磁	不明
717	6ADC-O	"	碗
718	"	白磁	碗
719	"	青白磁	不明
720	6ACD-P	青磁	碗
721	"	"	不明
722	6ADC-R	白磁	碗
723	"	"	"
724	6ADC-K	"	不明
725	"	"	碗

白磁の大半を占めるのはやはり碗であり、他に三足の切立香炉片と皿があるが、これらはやや時期が下る。碗には、口縁部が内彎し、端部外面にの小型玉縁を持つもの(706)、外方に直線的に開く口縁部で、幅広の玉縁を持つもの(704)、口縁部が内彎し上端が外反し端部が丸くおさまるもの(722)の3種がある。玉縁口縁の碗は、口縁部下半以下が露胎で、口縁部外面はロクロケズリで調整する。皿(701)は狭い平底と屈曲する口縁部からなる。口縁部下半以下は露胎で、釉調は青味を帯びる。

E SK 1623 出土土器

第15次調査で検出した土壙SK1623から多量の土器類が出土した。遺構については既に『平城宮報告IX』において報告済みだが、SK1623から出土した土器は総数368個体におよび、土師器・須

Tab. 12 輸入陶磁器一覧

恵器・黒色土器・灰釉陶器・緑釉陶器・青磁・白磁があり、9世紀後半代の基準資料となりうるので、ここで出土遺物について紹介しておきたい。まず遺構の概要を述べする。

SK1623は平城宮西面南門（玉手門SB1616）の東方約20mの位

* 置にあり、南北5.1m、東西4.0m、深さ1.0mの長方形の土塋である。近辺には、馬寮地区に見られるような宮廃絶後に建てられた小規模な掘立柱建物があり、それらの建物で使用されたものを投棄した塵芥処理用の穴と考えられる。

i 土 師 器

* 土師器の器種には杯A・杯B・杯B蓋・皿A・皿B・皿C・高杯・甕・罎釜・甕があり、食器類が圧倒的多数を占める。皿Cを除き、いずれも同様な胎土組成をなし、II群系統に属す。

杯Aは法量の上から杯AI~AIIIに分かれる（別表4）。杯AI

* (80~82)は口径16~17cm前後で、高さ2.5~3.3cm。口縁部は外傾度が高く、口縁部上端がくの字形に屈曲する。杯AIの調整にはc・eの2手法が認められ、c手法の方がやや多い。杯AII(77~79)は口径14.0~15.5cm、高さ2.4~3.7cm。形態は杯AIと共通する。調整法にはc・eの両手法があり、その比は5.5:4.5でc手法が若干多い。杯AIII(80)は口径13~14cm、高さ2.4~3.1cm、調整法にはc・e両手法があり、その比は杯AIIと同様でc手法がやや多い。杯AII・AIIIの中には、燈明器として利用した痕跡をとどめる例が少数ある。

皿Aは法量によって皿AI・AIIに分れる。皿AI(88~91)は口径16.8cm、高さ1.7~2.0cmで、広い平坦な底部とくの字形に外反する口縁部からなり、口縁部は内側に巻き込み大きく肥厚する。調整法にはc(91)とe(88~90)両手法があり、その比は、7:3の割で前者が多い。皿AII(83~87)は口径14.6~15.3cm、高さ1.7cm。形態はAIと同様であるが、AIよりも器壁が薄く、口縁部の巻き込み小さくわずかに上方に突出している。c・e手法の比率は3:2で、cが多い。燈明器として使用された痕跡を持つ例が若干ある。

皿Bは磁器系器種を模した形態で、比較的長く細い高台と浅い皿部からなる。口縁部が内彎し皿部が比較的深いもの(92・94)と、直線的な口縁部で皿部が非常に浅いもの(93)がある。すべて調整はc₀手法による。

皿C(105~107)は口径10.3~10.6cm、高さ2.2cm程の小皿で、平坦な底部と大きく外反する口縁部からなる。調整はすべてe手

土師器	338
杯A I	19
A II	34
A III	37
杯B	48
杯B蓋	29
皿A I	34
A II	73
皿B	18
皿C	8
高杯	6
甕	10
罎釜	1
カマド	1

須恵器	7
皿B	1
鉢A	3
壺B	3

黒色土器	23
杯A	1
杯B	10
皿B	1
鉢A	1
甕	8
壺	1
硯	1

中国製陶磁器	2
青磁碗	1
白磁碗	1

灰釉陶器	14
碗	9
皿B	5

緑釉陶器	4
碗	3
皿B	1

土師器	318(86.8%)
須恵器	7(2.0%)
黒色土器	23(6.2%)
中国製陶磁器	2(0.5%)
灰釉陶器	14(3.5%)
緑釉陶器	4(1.0%)
計	368

Tab. 13 SK1623出土土器の器種構成

法による。ほとんど砂粒を含まない灰白色の粘土を胎土とし、すべてよく焼け締っているが、ひずみを持つ。

杯Bには底部と口縁部を共に備えた例が少ないため統計上から法量による分類は行ない得ないが、口径22.2cm、高さ5.7cmと大型で口縁部が内彎気味に立ち上るもの(100)、口径19cm、高さ6cm前後で底部からほぼ真直ぐ外方に開く中型品(97・98)、口径18.0cm、高さ4.0cmで口縁部上半部が屈曲する比較的小型のもの(99)の3種が認められる。いずれも口縁端部を内側に折り返し小さく肥厚させる。高台は低短で断面逆

三角形状を呈するものが多い。すべてc₀手法で、e手法で調整されたものはない。

碗(96)はロクロ製で、灰褐色を呈し硬く焼け締っている。高台は比較的高く、外方に八の字形に開く。

高杯(101~104)は扁平な杯部に長大な脚部をそなえたものである。6個体以上出土しているが、杯部と脚部が接合する例はない。杯部と脚部の接合法はすべて心棒に粘土を巻き上げる方法で、心棒には上下で径があまり変わらないものを使用している。104は杯部内面をヨコナデで、外面をヘラケズリで調整するが、粘土紐の巻き上げ痕跡をとどめる。裾部の縁部内外面はヨコナデで、それより上位の裾部内面はヘラケズリで調整。杯部・裾部ともミガキ調整は行なわれない。脚柱部はヘラにより五面体に面取りする。杯部片(101)・裾部片(102・103)も108と同様な手法で調整する。

甕には、口径が胴径を上回るいわゆる広口の甕(108・109)と、口縁部がくの字形に屈曲し、口縁端部が内側に巻き込み、胴部が比較的丸味を持つもの(110~112)がある。前者は口縁部内外面ヨコナデ、胴部内面を水平方向ヘラケズリで調整する。外面にはかすかにハケメ痕をとどめるが、全面には及ばず雑な調整である。後者の甕は口縁部内面を横方向のハケメで、外面をヨコナデで調整。110は胴部内面をナデで調整するが、頸部直下の内外両面には叩き成形の痕跡が残る。

罏釜(113)は甕Aの頸部直下に罏を付した形態で、罏は幅広の粘土帯を延して貼りつける。口縁部と罏部をヨコナデで調整する。

118は載頭砲弾形に粘土紐を巻き上げ、その一側面を下方から方形に切開して焚口とした、移動式竈の焚口上辺の破片。口縁端部を内側に折り返し、口縁部内外面をヨコナデで、体部外面をハケメで、内面をヘラケズリで調整する。この他、同様な形態だがやや大形のもの、焚口部周縁に廂が付いた竈の破片がある。

ii 黒色土器

黒色土器の器種には杯A・杯B・皿B・碗・鉢A・壺・甕・硯がある。硯のみがB類で、他のすべてはA類である。多くは細片で器面が剥落しており、調整手法が観察できるものは少量しかない。

杯Aと認定できる破片は1片しかなく、供膳形態の大半は杯Bが占める。杯B(313~317)

土師器	調整			
	c手法	e手法	不明	
杯A I	13	5	1	} c...58% e...42%
A II	18	15	1	
A III	20	17		
皿A I	24	10		} c...64% e...36%
A II	40	26	7	
杯B	48	0		
皿B	18	0		
皿C	0	6		

Tab. 14 SK1623出土土師器の調整手法

の口縁部はすべて内彎するが、上端で外反するもの (313・316) と、しないもの (314・315) がある。口縁端部はみな丸くおさまり、沈線を有する例はない。外面の調整は口縁上端ヨコナデで調整するものが多い。c手法による例は少なく、また外面にヘラミガキを施した例は 313・315の2点だけである。317は底部外面にもミガキを施す。

- * 皿B (318) は内彎する浅い口縁部を持ち、上端でわずかに外反する。口縁部外面にはヘラミガキを施す。

鉢A (319) は小片であるが、口径15cm程度の小型の鉄鉢形に復原できる。

小壺 (320) は口径9.4cm。卵形の胴部と外反する小さな口縁部からなる小型壺である。口縁部から肩部近辺にかけて横方向のヘラミガキを施す。

- * 硯 (323) はB類の風字硯で、縁部に沈線が巡る。底部外面には低短な脚が付く。

壺 (224・225) は内彎する体部に外反する小さな口縁部がつく。いずれも胴部の大半を欠損するが、平城京東三坊大路東側溝 (SD650) から出土した同種壺では断面逆三角形の小さな高台がついている。胴部上半部は横方向のヘラミガキを施す。

- * 甕 (321・322, 326~328) は丸い体部と比較的長く外反する口縁部からなり、端部を上方に若干つまみ上げ肥厚させている。口径12~14cmの比較的大型のもの (326~328) と、口径9.5~10.5cmの小型のもの (321・322) がある。

iii 須 恵 器

- * 須恵器の器種には皿B・壺・鉢・甕の他、混入品と思われる奈良時代の杯、杯B蓋、壺Kの破片がある。須恵器の大半は灰黒色を呈し、やや焼きが甘く、灰が降着した例でも十分に融けきらず白く斑点状にふき出している。白色の粒子をかなり含むやや砂っぽい粘土を胎土とする。

皿B (236) はやや外方に開く断面矩形の高台に浅い皿部を付す。口縁部は、一旦内彎気味に外方に開き、端部近くでくの字形に外反する。口縁部内外面をロクロナデで調整。底部外面は不調整で、ヘラ切り痕をとどめる。

- * 双耳瓶 (263) は、口縁部を欠損するが、平底と卵形の体部からなる。肩部付近に相對する位置に粘土紐を貼り付けた耳をもつ。胴部外面ヘラケズリ、肩部上位はロクロナデ、底部外面はナデで調整する。壺類としてはこの他、平底で徳利形になる底部片 (262) と、角高台で体部不調整のもの (261) がある。262は底部糸切りのまま不調整。

- * 鉢には、平底で外傾度が小さく内彎気味に立ち上る体部に外傾する短い口縁部を付すもの (259) と、広い平底ではほぼ直線的に外方に開き端部近くで内彎する口縁部をもつもの (260) とがある。前者は口縁部から体部外面をロクロナデで調整。底部外面は不調整で糸切り痕をとどめる。後者は口縁部外面の下半部をロクロケズリで、上半部をロクロナデで、底部外面はナデで調整する。

iv 灰 釉 陶 器

- * 灰釉陶器の器種はすべて供膳形態で、碗と皿がある。碗・皿とも製作技法の上で共通する特色を示すので、先に一括して技法上の特色について述べることにしたい。施釉法はすべて刷毛塗りにより、内面にのみ施釉している。重ね焼き焼成であり、器物同士の融着を防ぐため、底

部には断面が縦長で端部が尖る三角形を呈する高台、いわゆる「三日月形高台」が付いている。後述する1例を除き外面はロクロケズリで丁寧に調整する。胎土も共通した要素を持ち、全体的に暗灰白色を呈するやや砂っぽい粘土で、黒色の微粒子を含む。東濃産の灰釉と思われる。

碗は法量によってⅠ～Ⅳに区分される。碗Ⅰ(552・553)は口径10.3～11.5cm、器高3.7cm程度で、口縁部上位が外反する。553の外面調整は幾分雑で、ロクロケズリは底部と口縁部下位に限られ、上半部には及ばない。他の碗に比べ若干時期が降る可能性が高い。碗Ⅱ(551)は口径8.8cm、器高3.2cm。口縁部は内彎気味に端部に至り、上半部はほとんど外反しない。ロクロケズリは口縁部上位まで及ぶ。碗Ⅲ(550)は碗Ⅱと同一形態で、口径8.0cm、器高2.7cm。碗Ⅳ(549)は口径6.8cm、器高2.1cmで、口縁部上端部が外反する。口縁部外面には非常に細かいロクロケズリを施す。

段皿(554・556)の口縁部は直線的に大きく外傾し、内面に段を有する。いずれも底部を欠失するが、大小2種あり、大は口径11.7cm、小は9.8cmほどである。

皿(557・558)は内彎気味に外方に開き、端部近くが外反する口縁部をもつ。碗類に比べると、やや太い三日月形高台を付す。557は口径10.7cm、器高1.7cm。

v 緑釉陶器

緑釉陶器は3点出土した。617は腰が折れた稜碗に近い形態の碗の口縁部片で、口縁端部を外方に薄く引き出している。口縁部外面はロクロケズリで調整。口縁部内外面にヘラミガキを施す。暗灰緑色の釉が掛り、内部面が灰黒色を呈する硬陶緑釉である。618は稜碗の底部近辺の破片で、端面が幅広くわずかに内側にくぼむ低い貼付高台を付し、切高台風に見せている。見込みおよび高台部にはトチンの痕をとどめる。灰緑色の釉が掛り、内部面が暗灰白色の硬陶緑釉である。619はほぼ完形の深碗。口径19.8cm、器高6.2cm。蛇の目の切高台が付く。全体的に分厚く、口縁端部の引出しにもぶい。見込みには生地焼成時の重ねのあたり(輪状痕跡)とトチンの痕を残す。口縁部外面をロクロケズリ、内面をロクロナデで調整したのち、両面および見込部に細かいヘラミガキを加える。黄色味の強い淡緑色の釉が全面に掛り、断面が灰白色を呈する軟陶緑釉である。

vi 磁器

輸入陶磁器としては青磁・白磁があり、器種には碗がある。各1点ずつ出土。

青磁碗(726)は底部を欠損するが、ほぼ直線的に外方に開き上端部がわずかに外反する口縁部を持つ。オリーブ色を帯びた暗緑色の釉が掛る。白磁碗は口縁部の小片で、小さな玉縁を持つ。図示できないがやや新しい時期の白磁とみられ、混入品の可能性もある。